

へき地・小規模校の1日訪問による学生の意識と端緒的教育効果

川 前 あゆみ
(北海道教育大学釧路校)

Change of Consciousness of Student who visit Rural and Effect of Education

Ayumi KAWAMAE

1. 課題と方法

本稿の課題は、へき地に根ざす新任教師を育成するための、大学での教師教育のあり方を検討する一環として、へき地校の1日訪問を通して、新入生の意識変化をとらえることを課題としている。すなわち長期的な体験ではなく、新入生の時期に1日という短期的な訪問を行うことの端緒的教育効果を取り上げていく。

本研究で調査対象として取り上げる北海道教育大学釧路校では、1年次の5月に、新入生全員がへき地・小規模校を訪問する新入生研修を実施している。この新入生研修に焦点をあてながら、学校現場を訪問することの教育的な効果を学生の意識の変容から明らかにし、地域に根ざした教師教育の実践の一環として、本研修の意義と今後の課題をとらえたい。

新入生研修の特徴と意義としては、第一に、新入生という入学直後の実施時期の意義である。ほとんど教育的な知識を学んでいない段階でのへき地校訪問の教育効果の程度が問題となる。むろん様々な知識や観点を身につけてからへき地校を訪問する方が訪問自体の教育効果は高いが、それでは逆に、大学での講義としてへき地校の意味を知識として学んでも、実態経験がないために、へき地校の認識がイメージとして深まっていけないという側面もある。

実際に、別の大学講義「へき地教育論」の中での感想文として、「へき地を見る評価点が最も変化した契機の一つは、新入生研修でのへき地校訪問であった」という意見が多々あった。そのため、未知の世界であるへき地教育については、講義と体験は、併行的に進めることが望ましいと考えられる。

したがって、新入生研修の目指すべき教育効果の目的は、あくまでも教師を目指す者が最初に学校に行くことで動機づけとなる端緒的な「感動体験」という効果に限

定してとらえていることを前提にしなければならない。

第二の特徴と意義は、新入生研修でへき地校に赴くことで、多くの学生の出身学校である市街地の学校と比較するという点である。釧路校の場合は、1年生の時から、「教育フィールド研究」という釧路市内の市街地の学校に毎週赴く教育実習的な授業がある。したがって、市内の学校に入って市内の学校の様子を勉強するため、逆にへき地校を見ておかないと、市街地の学校が標準の学校と思ってしまう可能性もある。むしろ自分の出身学校や「教育フィールド研究」で行っている学校とは異なるへき地小規模校があるという認識を持ってもらう必要がある。そのことが、学校の規模や地域によっても、学校の雰囲気や教師の指導の仕方も異なるという幅広い発想で、これから学ぶべき指導のあり方を幅広くとらえることができる。

第三の特徴と意義は、へき地地域に出て行くことによって、地域の様子にも触れることである。へき地校に赴任するためには、へき地地域に住むことでもあるため、そのような地域に住むことの抵抗感を少しでもなくしていかなければならない。

釧路校が位置する道東地域は、過疎地域指定率やへき地・小規模校の割合が北海道全体に比べても高く、へき地校指定率も、18万人口の釧路市や根室市を含めても70%以上を占めていて高い。道東の小・中学校に勤務する教員は、北海道教育大学出身者であることが多く、また、大学を卒業と同時に、教師として最初に勤める学校がへき地・小規模校であることも珍しいことではない。

そうした状況の中で、学部4年間の学生生活において、へき地地域で教師として働くことの意義を伝えることは教育大学の使命の一つであり、このことはまた、大学の「特色ある教育プログラム」にも位置づけられている。

現在行われている新入生研修は、日帰り短期間での研修であり、その教育的な効果をとらえる限界もあるが、

その後の釧路校のへき地行事体験、へき地教育実習などの継続的なへき地教育研究をとらえる上では、端的な教育効果をとらえる意義がある。

本調査研究では、2007年度に実施された釧路校の「新入生研修」における1年生からの事後アンケートに基づき、学生のへき地・小規模校への意識の変容と教育的効果を明らかにする。そして、地域に根ざした教師教育の実践課題と今後の展望についてとらえることを目的としている。

2. 新入生研修の実施日程および対象学生の特性

2007年度の新入生研修は、日帰り1日研修で2007年5月25日金曜日に実施した。訪問先市町は、根室市5校、浜中町11校、厚岸町7校の計23校を8班編成で訪問した。

研修は毎年の実施であるが、大学再編の中で、へき地教育の特性を打ち出して以降の実施であるために、学生のへき地への関心は高いことが予想される。

本意識調査で取り上げる対象学生は、研修に参加した学生196人であり、研修事後アンケートとして記述したものである。釧路校1年生の出身地をみると、道外出身者は45.2%を占めていて、他キャンパスと比べても高いことに特徴がある。道外出身者のほとんどは、北海道のへき地のイメージは全く分からないため、学生の出身地の特性からも、大学入学後の間もない時期に、道東のへき地・小規模校を実際に訪問体験することの教育的な意義は大きいと言える。

3. 受け入れ校の一般的研修プログラムとふれあい体験の特徴

(1) 受け入れ地域・学校の特徴

研修を受け入れていただいた根室市や浜中町、厚岸町の3市町はともに、それぞれの学校区で漁業を中心とした学校と、酪農業を中心とした学校を持ち、第一次産業を主な基幹産業としている。北海道のへき地の場合は、兼業農家はほとんどないため、児童の家庭のほとんどが第一次産業に従事している家庭である。

研修受け入れ23校の学校規模の特徴としては、どの学校も全校児童が50人以下の学校であり、小中併置校が5校、極小規模校が5校で、さらに、訪問校のほとんどに複式学級が設置されている小規模校である。

したがって、学生のほとんどは、全校児童数が1学級人数相当の規模の学校に初めて訪問することになる。また1学級に2学年が入っている複式学級をはじめ見る学生が多く、全く異なる学級の形式に新鮮な感情を持つようである。

(2) 研修での取り組みと児童とのふれあいの特徴

研修当日の訪問校での一般的なプログラムは以下のようである。

研修当日の一般的なプログラム

1. 大学生の到着
2. オリエンテーション
3. 学校概要の説明・校舎見学
4. 全校集会：対面式
5. レクリエーション：子どもたちとのふれあい
6. 体験学習もしくは授業参観
7. 児童・教員との全校給食
8. 昼休みの活動：子どもたちとのふれあい・子どもたちと清掃活動
9. 授業参観・クラブ活動・各委員会活動
10. 研修の感想交流
11. お別れ会
12. 大学生の離校

当日のプログラムは、学生の訪問校到着時刻と訪問校出発時刻をあらかじめ学校に連絡し、それぞれの学校が学生の滞在時間内において通常の学校の様子を体験できるように時間割が設定されていた。また全体として、複式教育や小規模校の特性、さらには、その地域の特色を認識・体験できるようなプログラムの設定を意識している。

例えば、児童との遊びでは、学級の中での遊びではなく全校集会の中での全学年児童との遊び（ゲーム）や、全校体育、異学年交流も含めた全校給食、などが企画されている。授業では、複式授業における「わたり」や「ずらし」の特徴の解説、個に応じた指導の時間の確保、なども見せてもらう。体験的な活動では、学校林を所有している学校では学校林を使った自然体験学習、運動会前の全校練習に参加など、があげられる。運動会は地域と一緒に実施するため、地域が協力してくれるという話しを聞くことができた学生も多い。

どの学校の研修内容をもみても、特に個に応じた指導や少人数教育の積極面を体験できるようなプログラムが準備・計画されていた。これらのプログラムは、都市部の大規模校で育った学生にとって、全校児童と一緒に活動すること自体が初めての体験であり、戸惑いと同時に、そうした教育活動に感動するようである。その感動とは、子どもどうしの仲の良さや教師と子どもの親密さ、皆で活動に取り組むことの一体感を、学生の立場から体感していた。これらのプログラムの特性は、1日という短い体験ではあるが、へき地小規模校の特性を瞬時に感じ取ることができるほどの体験でもある。

4. 新入生研修における事前・事後研修と体験活動の補完

大学が新入生研修に参加させるまでの指導としては、主に全学生を対象とした共通の全体ガイダンスと、引率教員による訪問校ごとのガイダンスの2回の指導を中心として行った。事前・事後のガイダンスは、2回という短いものであるが、このような事前指導・事後指導が訪問体験をより意義の高いものに認識させる条件となる。したがって、へき地の研修プログラムでは、常に経験に併せて、いかに事前・事後指導を充実させるかが大きな課題となる。ここでは、その指導の目的と内容について取り上げる。

まず、大学入学後の間もない学生たちは、直前まで生徒の立場として学校で過ごしてきた側である。大学生とはいえ訪問校の子どもたちから「先生」と呼ばれることの立場の違いに、大きな戸惑いとうれしさを感じるようである。

そのため、全体ガイダンスでは、4年間の在学中に学校を訪問することが多くなる学生に教師の卵として、訪問者としての心得を理解しなければならない。学校現場からは、へき地・小規模校ゆえに、訪問者である学生たちの教師の立場をわきまえない言動が、子どもたちに多大な影響をもたらすことを危惧されることが多い。日常生活の中で他人と接する機会が少ない子どもにとっては、大学生が訪問することだけで大きな影響をもたらすことになるが、さらに先生の卵としての学生から大きな影響を受けてしまう。こうしたことから、事前指導では、挨拶をきちんとすることや言葉遣い、服装に配慮することを中心に指導し、さらに単なるお兄さん・お姉さんの遊び相手ではなく、教師の卵であるという自覚を持って、言動には責任を持つことを意識させる必要がある。

訪問校別事前指導では、研修当日の引率教員から、訪問校からの連絡事項の周知や、当日のスケジュールの確認、訪問校の学校や地域の概要について情報を共有し、また、学生どうしや引率教員との事前交流を行った。

事前学習では、例えばインターネットを用いて情報検索しながら、訪問校の児童生徒数や教職員数、学校の歴史、地域の基幹産業、自然環境、当該町村全体を把握・理解することに努めた。

さらに事後指導では、自分が見た経験を語りながら、感じたことを共有するという経験交流を行った。いわゆる「シェアリング」である。実施回数が1回だけの経験交流であり、必ずしも担当教員が内容的に熟知しているわけではないので、学生の経験交流という域を出ていないが、学生が持った率直な感想が交流されるだけでも、認識の広がりとしては意味がある。

5. 研修事後選択式アンケート結果と学生の意識変化

すでに見たように、へき地小規模校に初めて赴く「感動体験」を中心に新入生研修を位置づけてきたが、その教育効果をアンケートから見られる意識変化からとらえたい。新入生研修に参加した196人全員の事後アンケートから、へき地・小規模校の訪問についてどのような意識が見られたかを以下にとらえる。

アンケートは、新入生研修の当日中に回収した。アンケート項目は、選択式の設問が14問で、5段階評価で選択してもらった。自由記述式は3問で、感想や教育観の変化等について記述してもらった。回答者の学生自身の通学学校規模別（図1）では、中・大規模校出身者が65.8%、へき地・小規模校出身者が26.5%である。また、回答者の男女比は、ほぼ同数である。

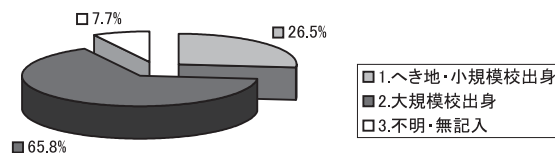


図1 学生自身の出身通学学校規模

学生のアンケート結果の満足度や達成感は、どの数値も高いが、すでに述べたように、新入生のレベルから見「感動体験」として意識を評価するものであり、学生が実態としてへき地教育の特性を発見してそのスキルを身につけたことを意味するものではないことを踏まえておかなければならない。

選択式の設問では、「子どもたちとの触れ合い・交流」（図2）が「よくできた」65.8%、「できた」27.6%を合わせると93.4%を占めていて、後述するように少人数の環境における子どもとの関わりやすさが積極面として表れている。学生は、すでに釧路校の「教育フィールド研究」で市街地の学校に入った後なので、とりわけ市街地の学校での触れ合いと比較して、へき地小規模校での子どもとの触れ合いのし易さも感じている。

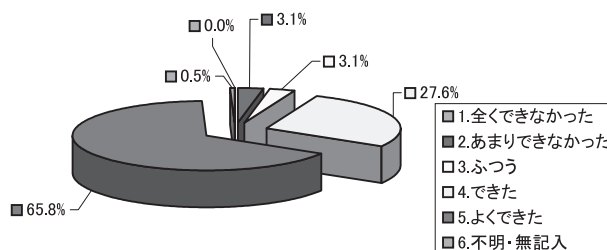


図2 子どもたちとの交流・触れ合い

「小規模校・子どものすばらしさを発見できたか」(図3)については、「よくできた」71.4%、「できた」25.5%を占めていて、合計すると96.9%と高い。すばらしさの発見ができた意識する背景は、元々持っていたへき地のイメージの低さからすれば、その反動で高くなったことと、事前指導において、へき地小規模校の悪いところばかりをとらえずに、意識的にいいところをとらえるように指導していることによるものである。

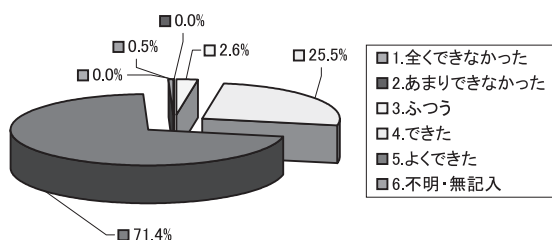


図3 小規模校・子どものすばらしさを発見できたか

訪問によって、「へき地校の先生になりたいと思ったか」(図4)については、「是非なりたい」が52.6%である。へき地のすばらしさを発見できたとしても、実際にへき地に住みへき地校の教師になるとしたら、まだその抵抗感はまた高いと言える。それでもへき地校の教師になることを「考えてみたい」とする学生は38.8%で、「なりたい」と「考えてみたい」を合わせると91.4%を占めた。

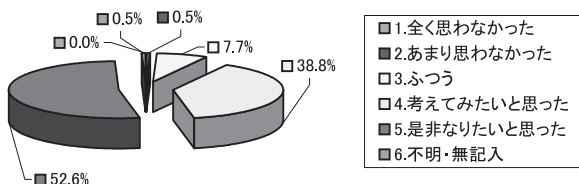


図4 へき地校の先生になりたいと思ったか

また、「へき地・小規模校のプラス面を発見したか」(図5)についても「かなり発見できた」68.4%、「少し発見できた」29.6%を合わせると98.0%と高率である。へき地やへき地校に定着する教師を養成するためには、プラス面を発見していくことを意識的にしなければならないと考えているが、その指導目的は浸透したと言える。これはへき地教育に関して、意図的な指導に見えるが、現実にへき地小規模校に赴任した若手教師の現実を考えると、プラス面を発見してもらうことから始めることは、へき地教育の重要な端緒となるものである。以上から、その端緒的な教育効果はあったと言える。

これらの意識は、「感動体験」を目的としたものであるために、一定の短い期間の中で効果が発生するものではある。しかし短期間ではありながらも、学生自身のこ

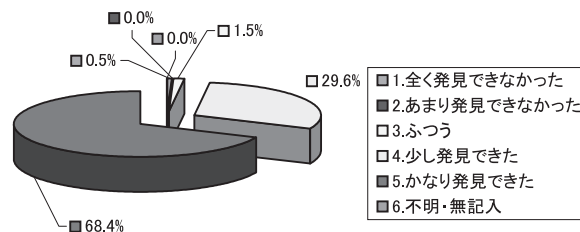


図5 へき地・小規模校のプラス面を発見したか

れまで持っていた学校観や子ども観を大きく広げたり、変えたりする体験であったことが言える。新入生研修の当初の目的としては、まず学校観が広がり、自分の受けてきた学校の雰囲気や指導方式の枠を超えて、違う雰囲気の学校のあり方があることを認識できただけでも、教育効果はあったと考えられる。

さらには、「新入生研修に参加して、大学で学んでいく上での新たな目標が見えてきたか」(図6)についても、「よく見えてきた」38.3%、「見えてきた」49.0%を合わせると87.3%を占めた。この内容については、定かではないが、教員養成大学一般の目的である「教員になること」や「北海道のへき地校の教師になること」などの漠然とした目的意識と適合したことが背景にあると見える。五感を用いて、へき地校を実際に体験することによって、へき地小規模校の良さを全般的にとらえることができたと見えよう。

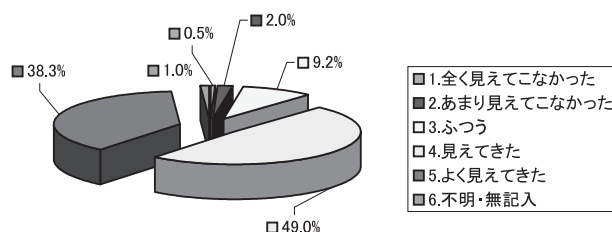


図6 大学での新たな目標が見えてきたか

6. 自由記述式アンケート結果と学生の意識

自由記述に表現された記述内容を見ても、文章で書いてもらう大変さがありながらも、小さな学校の良さをまさに五感を使って体験したことが見える。具体的にどのようなことが良かったのかを、記述式の設問3問のうち、2問からとらえてみたい。

「研修全体に対する評価」(表1)では、各記述文章内容の意味合いをこちらで大別すると、全体の記述意見の中で、「子どもとの関わりが深められたこと」に関する記述が40.3%、「小規模校の良さを発見できたこと」に関する記述が20.9%、「複式授業の良さを理解できたこと」に関する記述が15.8%であり、この3つが全体の大勢を占めた(表抜粋)。

No.	表1 研修全体に対する評価
1. 子どもとのかかわり	
122	皆良い子達ばかりで楽しかったです。小規模校のいいところがすべて当てはまる絵に描いたような学校でした。校舎もきれいで新鮮でした。最後の見送りで、走りながら手を振ってくれて、まるで映画かドキュメンタリーを見ているようでした。
124	子どもたち一人一人がとても親切で、とてもいい子達ばかりだった。へき地に対する思いが変わった。
130	児童・生徒数が4人の中での運動会の練習や、野球での交流がとても楽しかったです。教頭先生のお話や、現場の先生の言動を聞くことができとてもよかったです。普段は経験できないような授業の雰囲気味わえたことがとてもよかったです。
131	子どもたちとの触れ合いと小規模校の現場を肌で感じたこと。
135	へき地校に実際に行き、雰囲気が分かったこと。学校と地域とがどのように連携しているか知ることが出来たこと。
136	私は今までずっと大規模校で育ってきたので、へき地小学校がどのような場所なのか全く分かりませんでした。今まで持っていたへき地のイメージが今回の研修で変わった気がします。
138	今のへき地の現状を知り、体験が出来たこと。
139	小規模校への考えが変わった。仲が良いというのを身をもって感じる事ができた。
144	小規模校の実情を知ることが出来た。
146	小規模校の良い点をたくさん発見できたことです。
147	へき地校というふだんは行くことが出来ないところに訪問できた事自体良かったし、その中で実際に子どもたちに触れ合っただけの子どもの純粋さ、素直さに触れることが出来た。
148	へき地教育の現状が分かった。
157	これまで比較的小さい学校で生活してきたが、全校生徒が10人みたいな小さい学校は見たことがなかったから良い経験になった。そして本格的な複式授業を見ることが出来てよかった。
158	今までの小学校とは見方が変わって、違う視点から物事を捉えられるようになったことが良かったです。1日で全ての学級が見れたので良かったです。
159	特性を生かしてのびのび生活しているなあと感じたので、へき地・小規模校への偏見がなくなった。
160	へき地校のイメージが変わったことです。確かに生活の不便を感じましたが、学校というものは、他の学校と何も変わらず、ただ生徒数が少ないというだけで、子どもとの関わりも最初は戸惑いを感じましたが、仲良く関わることができました。
161	へき地校のプラスの面を多く見れたこと。学年の別なく皆が仲いい。教師と児童の距離が近い。
163	へき地校の絆の強さ等たくさんのプラス面を発見できた。
170	初めて小学校に行って、それが小規模校であり、とても溶け込みやすかった。
177	へき地校ならではの学年間の交流をたくさん見ることが出来た。
183	へき地の様子が少し分かった。学年を越えた友達が多いのが分かった。
184	今までへき地・小規模校のことについて知らないことばかりだったので、へき地の学校の特色を生で見ることが出来たので良かった。子どもたちと交流が出来てとても楽しい時間を過ごすことが出来た。
9	子どもたちとの接し方がよく分かったこと。
16	子どもたちと交流できた。
17	たくさんの児童と触れ合い、少人数だったので一体感を味わうことが出来た。
18	短い時間の中であんなに仲良くなれて嬉しかったです。へき地に対するイメージが良い方向に変わってよかったです。
21	授業での先生と子どもたちとのやりとりをまともに見ることが出来たこと。子どもたちとたくさん話をしたり、遊んだり出来たこと。
23	少人数である分、児童一人一人と触れ合うことができ、良いところ、悪いところを少し発見できたこと。
36	実際にへき地校に行けたことがまず良かった。自分の体験したことのない環境で学んでいる子と交流できたことが貴重な思い出となった。
42	へき地に実際に行くことで、イメージがマイナスよりむしろプラスの方が大きいのではないと思った。生徒と交流が良く出来て、最後に「ありがとう」と言われたときは、絶対教師になりたいと思った。すごく嬉しい体験だった。
43	児童と先生の仲のよさが良く分かった。児童と仲良くなれてよかった。
46	子どもと触れ合い、コミュニケーションをとることが出来たこと。初めてへき地校を訪問し、実際に現場を見ることが出来たこと。
47	子どもと触れ合えたこと。
48	子どもと直に触れ合えたこと。実際にそこで働いている教師の方に話を聞くことができた。子どもの信頼を得ることの難しさを知れた。
50	何より、子どもと触れ合うことの楽しさを再認識できたことが良かった。
54	へき地校の子どもたちと触れ合えたこと。先生方の指導方法がとても勉強になった。
55	子どもと触れ合うことが出来てよかった。複式授業の見学が出来てよかった。

No.	表1 研修全体に対する評価
63	一つ一つの体験や授業を通して、子どもたちと話す機会が多く取れたこと。また、何の抵抗もなく、私たち大学生に話しかけてくれて遊びに誘ってくれた子どもの素直さに触れることが出来たこと。
64	直接へき地の子どもと関わって、授業を一緒に受けたり会話することで、子どもたちのよさ、子どもたちが受けている環境的な影響をきちんと把握できたこと。
70	へき地校の子どもたちの雰囲気に触れることが出来てよかったです。子どもたちはとても素直で新鮮でした。
72	子どもが思っていたよりもずっと親しく接してくれたのですぐに仲良く話せた。
73	子どもたちとたくさん関わることができたこと。そしてへき地の子どもたちの素直さに触れることが出来たこと。へき地の子どもたちの目の輝きは大規模校の子どもたちとは異なっているように感じられた。少年犯罪などの話題が絶えない中で素直な子どもたちと触れ、話しが出来たことは私にとって貴重な機会となった。
77	子どもとの接し方が分かった。
79	子どもから学ぶということを学べた。
82	へき地校の授業風景を見て、先生と生徒一人一人のコミュニケーションの多さと工夫の仕方はとても有益になりました。また、子どもたちとたくさん触れ合えて楽しかったです。子どもたちはとても素直で無邪気でした。
86	実際にへき地の学校でへき地の子どもたちとたくさん触れ合えたこと。へき地の周りの環境が見れたこと。
88	多くの子どもと触れ合うことが出来ました。
89	子どもたちの素直で、明るく元気な心を見れたこと、地域とのかかわりをとても大切に、自然と触れ合うことで成長していく子どもたちを見ることが出来たこと。間近で授業を受けられたこと。
90	子どもを好きになったかもしれない。初めての山菜を食べたこと。
91	自然と触れ合いながら子どもたちと交流することが出来たこと。複式学級を見て、授業参加できてよかった。おいしい給食を子どもたちと話をしながら食べることが出来たこと。
98	子どもと触れ合えたこと。へき地校の印象が変わったこと。
99	生徒一人一人と話すことが出来た。
111	子どもとどう仲良くなっていくかということが分かった。
115	子どもたち一人一人とたくさん時間触れ合えたこと。教育フィールドの時よりも多く話すことが出来、学年関係なく子どもたちの生き生きした姿を見ることが出来た。
117	初めてへき地に訪れて、自分にとってよかったことは、もちろん児童と深く関わられたことです。1～6年生、特に3、4年生と深く関わられてよかった。
118	教育フィールド研究とは違うへき地校の小学校へ行くことは、大規模校とは違う、児童生徒とのふれあいが出来てよかった。
119	多くの子どもたちと触れ合うことが出来た。体力テストのやり方が違うことに少しびっくりした。だが、その方が流れよく進んでよかった。給食も1～6年生と食べられました。みんなが違う話をするのでギャップを感じた。
120	子どもたちが元気で優しかったです。
121	子どもたちと触れ合えてとても楽しかった。別海の牛乳が飲めてとても嬉しかった。授業を生で見れてとてもよかった。
125	子どもとの触れ合いが出来てよかった。フィールドも結構小規模だが、より小規模で楽しかった。
127	子どもたちとたくさん触れ合うことが出来ました。へき地というと、あまりいいイメージを持っていませんでしたが、子どもたちの素直さや、一生懸命な気持ちが伝わってきて、今までの考えをプラスのイメージに転換することが出来ました。
128	へき地・小規模校の子どもたちと触れ合うことが出来、子どもたちの大変素直な心に触れることが出来、良かったと思いました。又、へき地・小規模校の雰囲気を知れてよかったです。
132	子どもたちとたくさん交流できたこと。たった1日だったけど、児童とのコミュニケーションだったり、外で遊んだり、何より「〇〇先生」と言われるなど、とても有意義に1日を過ごすことができました。「〇〇先生」という言葉は新鮮で、未だ教師の大変さは分かっていませんが、教師っていいなって思いました。
133	学年の上下に関係なく、子どもたちに接して、とても豊かな気持ちになりました。また、新任教師の立場の自分を想像して、不安を感じていたのですが、子どもたちの純粋な笑顔が私の不安を消し去ってくれました。
134	実際のへき地校というフィールドの中で肌で感じながら児童と触れ合うことが出来たこと。
140	自分の行った学校はとても明るい子ばかりでとても楽しく過ごせた。明るく親切であった。へき地の学校にすぐ行きたくなった。
143	子どもたちとの触れ合いが多かったこと。
150	子どもたちと楽しい交流ができたこと。
151	短い時間でしたがコミュニケーションの大切さを知りました。子どもと触れ合うと自然と笑顔になっていくのが良かったです。
152	一人一人の子どもと少しずつでもコミュニケーションをとることが出来た。複式学級での授業を見学することが出来てよかったです。
153	へき地の子どもたちの触れ合いの中で子どもの優しさや共同性を発見することが出来た。具体的にイメージできるようになった。
154	少人数なので全校児童、先生方と触れ合えた。児童のご両親とも授業に参加できた。

No.	表1 研修全体に対する評価
155	複式学級の授業を見ることが出来たこと。地域と学校との関係の仕方がとても良いと感じました。
165	教育フィールドと違う学校だったので学校ごとの児童の違いを見れた。先生が気づく前に児童同士で助け合っているのが見れて良かった。学年問わずみんな仲が良く、輪の中に入れた。
166	子どもたちと直接話したり、活動したり出来たこと。
167	最初は子どもたちと仲良くなれるか不安だったが、すぐに仲良くなっているんな話が出来たこと。
168	とにかく子どもと関わることが出来たのが1番良かった。今まで経験したことがないへき地を知れてよかった。
169	日ごろ大学では経験できない子どもとの触れ合いが出来てとてもよかった。子どもの人数は少なかったけど皆元気で明るい子ばかりだった。学年を越えて皆仲良しで学校全体の雰囲気が凄く良かった。
181	最初は少し緊張して戸惑ったけれど、歓迎会や交流会を通して、児童に話しかけやすくなりました。私たちが企画した「猛獣狩り」も盛り上がり、ほっとしました。あと、子どもたちが優しく接してくれたのが一番嬉しかったです。
2. 小規模校の良さ	
2	小規模のよさが見つけられた。
8	実際のへき地校を訪問して、へき地にしかない色々なものを見たり、感じたりすることができてよかった。
14	小規模校に対する「閉ざされた」イメージがなくなったこと。内部だけでの付き合いに留まって、外部の人を受け入れない…という固定観念があったのが、児童の人なつこさを見て一気に無くなりました。
15	少人数でも楽しそうに過ごしていました。小規模だからこそ、他学年との交流も盛んになって、皆仲良しで率直でした。
19	フィールドで行っている学校とへき地の学校の様々な違いを感じることが出来た。
20	実際に自分の目で、小規模校での生活や勉強を見ることが出来てよかった。複式学級の授業や全校での体育など初めて見るものが多かったので、とても新鮮だった。
22	へき地校のマイナスイメージが少しなくなった。
25	へき地校の素晴らしさを知ることが出来た。
31	複式授業だけでなく、小中併置校の実態が見られて良かった。
35	へき地校に訪問させていただいて、思っていたよりも素晴らしい学校だったので、とても貴重な体験をした。複式学級を間近で見学できたので勉強になった。へき地の子どもたちは、落ち着いていてギャーギャー騒ぐ子がいなかったのびっくりした。
45	小規模校に触れることが出来、子どもたちのいいところをたくさん発見できた。クラスが少ないなりの授業の取り組み方、進め方をよく理解できた。
49	大規模な学校しか知らなかったから、新しい発見がたくさんあった。子どもの交流の仕方や教師、地域の人たちとの距離、知識としてではなく肌で感じれたことがとても良かった。
51	少人数の指導について知ることが出来た。
52	少人数だからこそ、すべての学年との付き合いが深い。
53	小規模校のプラス面が分かった。複式授業の様子が分かってよかった。
61	へき地校のいいところをたくさん見つけられたところが良かったです。マイナス面が多いように思われがちですが、少人数だからこそ、全員が授業に参加して豊かな心を育める環境にあることを学べました。
62	今までテレビでしか見たことのなかった小規模校に行けたことが良かった。
65	へき地の印象がすごく変わった。とても良くなった。
66	最初に校長先生が一人一人の結びつきが強いことがいい所だと言っていたが本当にそう思った。全校生徒で農園作業をしたり、昼休みも遊んだり、本当にたくさんのお話を学びました。へき地のイメージはあまりよくなかったし、授業を受けてもあまりよく分かっていなかったけど、実際にその学校に行ってみると良さが本当に分かってきて大変いい経験になった。
67	縦のつながりがすごく良かった。総会するとき、議長がみんなを名前で呼んでいて驚いた。先生方も仲がよさそうで、地域とのかかわりも密接で都会の学校にはない良さがあったと思う。
68	へき地の良さ、厳しさを学べた気がする。
69	へき地のよさを再認識するいい機会でした。やはり子どもたちが素直で、自分から行かなくても子どもたちから寄ってきてくれてとても嬉しかったです。教師への思いが強まりました。
71	私自身へき地校出身ですが、教師の目線でへき地校を見たことがなかったので、今回の研修でへき地校のよさを再発見できた。また、地域性も知ることが出来た。
74	お昼休みに体育館で皆一緒にバナナおにをしたこと。本当に楽しかった。
75	へき地のよさをたくさん発見できたこと。
76	想像の中でしか描けなかった「へき地の学校」というものに直接触れることが出来たのは本当にプラスになった。
78	授業でへき地、小規模校について勉強し、それを実際に体験できた。
80	へき地での体験学習の場を与えてくれたことに感謝しています。それはなぜかという、私はへき地校は人数が少ないので人と接する機会がない、つまりコミュニケーション能力がつかないと考えていました。しかし、この体験学習を通してそれは間違いがありました。人が少ないからこそ親密な関係が築けることもありました。

No.	表1 研修全体に対する評価
84	全校生徒と交流できて良かったと思います。自分の目でへき地のまわりにある豊かな自然を見て良かったです。
85	自分は小中学校とへき地、小規模校で育ってきて、自分の育った地域も学校も誇りに思っていたので、さらにへき地・小規模校への魅力を感じることができて、是非へき地で先生をしたいと思いました。
87	実際にへき地に行くことが出来、へき地へのイメージが変わったこと。
92	自分の中で考えていたへき地校のイメージが大きく変わった。大規模校とは違うよさがあり、全学年を通してみんなの仲がよく、授業中も手を挙げる子が多いと思った。
95	やはりへき地ならではの良い面を見つけられたこと。
104	へき地・小規模校に対するイメージが変わったこと。また、たくさんプラスが見られたこと。
105	へき地・小規模校への見方が変わったこと。子どもたちを身近に感じることができて良かったです。
106	へき地は人が少なく、マイナスなイメージが強かったけど、この研修を通してプラスなイメージが変わったことが嬉しかったです。
107	スポーツテストの補助が中心だったことで、1～6年生まで、少人数で触れ合うことが出来て仲良くなった。積極的に子どもたちに声かけできて良かった。
108	初めて小規模校に行ってみて、新しい体験となったこと。
112	へき地への見方が変わったこと。
114	小規模校のいいところが実感できた。
116	自分もへき地校出身なので、懐かしい感じがした。そのなかで、自分と同じようなことを考えながら生活している子どもたちを教える側の視点から見れたこと。

さらに、「教師と子どもとの距離が近いことや信頼関係が強い」などの教師に関することが全体の中で3.1%、「へき地のイメージが良い意味で変わったこと」、「教職に対する意識の高まりになったこと」、「フィールド研究で関わっている市内大規模校との対比ができたこと」、を合わせると17.9%いたことから、へき地小規模校の特性をとらえる評価を多面的に行っていたことが分かる。

「子どもとの関わりが深められたこと」の中身を見ると(表1)、「よい子たちばかり」「一人一人がとても親切」「子どもたちが素直」という、部外者に対するへき地の開放的な雰囲気や他人に対する児童の親近感を感じ取った学生も多い。また「学年間の交流が多い」や「児童と先生の仲の良さ」など、へき地小規模校の縦の人間関係の良さについてとらえている学生も多い。

「小規模校の良さを発見できたこと」の中身を見ると(表1)、抽象的な表現ではあるがやはり「へき地のいいところをたくさん見つけられた」「良い面を見つけられた」などの印象としてのいいイメージを持ったという学生も多い。また「思っていた学校よりもすばらしい学校だった」「イメージが変わった」などの元々持っていたマイナスイメージが転換したという学生も多い。記述としては全体のイメージであって漠然としてしかとらえられていないが、どこか漠然とこれまでの出身校や市街地校と異なるイメージを受けたようである。

「研修を体験したことによる学生自身の教育観の変化について」(表2)の記述でとらえると、選択式の設問でも高く評価されていた学校や子どもの良さをとらえるような、次のような意識が多くあった。

まず、「へき地をプラスとして考えること」をあげた

学生が19.9%いた(表2)。この中には様々なプラス面をとらえた内容が一緒に入っているが、何らかの特徴を意識してプラスとして感じることは、端緒的な体験としては成果があった。「子ども観の転換と少人数指導の中での子ども理解の大切さ」と、既述した「子どもと学生の距離の近さであり、教師と子どもの近さ」が全体の13.3%あった。やはり教師と児童、児童どうしの密接な関係の深さを感じ取っている。

また、「地域を知る教師としての姿勢の大切さ」が10.2%ある(表2)。公立学校に勤める教師には、地域に根ざした教育活動や地域を思いやる姿勢の大切さを、学校と地域の連携のあり方として学んでいる。

さらに、へき地小規模校の教育活動を間近に観察する中で、「教師観の意識が変容した」学生も23.5%いた(表2)。教育活動は、児童と先生の信頼関係を媒介にしなければならぬが、そのような関係性の強さをとらえている。授業面では、複式授業の積極面と課題を感じながらも、授業の中での関係性として「人間関係の深さがあること」が全体の18.9%ある。

このように、へき地・小規模校の良さとして一般的に指摘されている、人間関係の良さや学校としてのまとまりがあることがへき地の良いイメージの基本となっており、さらに学校と地域のつながりも、短期間の研修でありながらも体得していた。へき地小規模校では、密接な人間関係が基盤としてあることを全体のイメージとしてとらえていた。このへき地校の特徴を漠然と把握しているだけでも、入学直後の新入生研修の体験としては、十分であると言える。

No.	表2 研修を体験したことによる自身の教育観（価値観・認識）の変化について
1. へき地の地域性と学校と地域のあり方について	
13	たとえへき地だとしても、周りの自然を利用していろんな活動をすれば、より子どもたちの興味・関心を引き出せるし、楽しい授業になるなと思った。
14	へき地に対して好感を持てた。
27	PTAの参加率を聞いたとき、とても驚いた。どこの保護者の参加率も大して変わるものではないと思っていたが、研修した学校の保護者の方々はほぼ参加していた。
29	3, 4年生の社会科を見学したときにかなり地元根付いた内容のことをやっていました。地元を知らなければならぬことが分かりました。
41	へき地だからといって遊ぶ場所や学習場所が少ないという考え方は間違っていた。その土地特有の自然こそが最高の遊び場であり学びの場であった。
48	へき地という所に、より地域と学校が深いつながりを持っていることに対して素晴らしいと思った。
55	へき地での児童の親や地域の方々はとても元気で学校に協力的だと分かった。
59	子どもはもともと純粋で、特に小中学生は人間関係や環境で人間性が違って来るのだろうなと思った。へき地の子どもたちは自然に触れ合う機会がとても多く、思いやりのある子どもたちが多かった。
70	その土地を生かして、活用して教育していくことが大切だと思った。
71	小規模校でしかできない授業のやり方や、先生方の気遣い、接し方が勉強になりました。地域の人々と一体になって学校を作り上げているんだなあと改めて感じました。
78	まわりにある自然を生かした授業を行なっていかななくてはならないときもあるので、自分自身も自然に詳しくなっておかなければならないということが良く分かりました。
84	自然体験をすることで、お互い助け合いながら、そして楽しみながら学ぶことが出来るので外に出ることも大切だなと思った。
115	やはり、教師と子どもの関係が親密でした。そして、中学生が小学生に運動会のダンスを教える場面があって良いなと思いました。
120	もっとよそよそしいと思ってたけど、皆温かく迎えてくれてとても嬉しかったです。それに教師と生徒の距離が近くて驚きました。
124	家庭だけでなく「地域」の子どもでもあるということを実感した。複式学級で授業をするのは大変そうだが、大規模校でもへき地校でも同じ子どもと触れ合うので利便性で地域に差をつけるのはもったいないと思った。
125	教頭先生のお話を聞いて、へき地校にとってPTAや地域との関わりはとても大切だと感じました。学校は教師と子どもの関係だけでなく、地域・学校・家庭が一体となって運営していく必要があると思いました。
140	大きな学級よりも地域と連携して、授業や行事に家庭の人が関わることで、子どもの成長を学校だけでなく地域で見守っていけることは、大きな学校ではなかなか難しいことだと思いました。
144	地域あってこそその学校ということが改めて分かった。へき地の先生になりたいと思った。
145	小さい学校は授業に保護者も参加できてコミュニケーションがとりやすいと思った。
165	運動会など色々な行事は、地域全体が楽しむという話を聞いて、教育とは学校の中だけではなく、周りの大人たちとも連携を取っていくべきなんだと感じた。
2. 少人数指導について	
3	少人数だからこそ、授業の進め方が難しい面もあるんだと思いました。
4	知らない世界（へき地校）だったので新しい扉が開いたような感じだった。この経験をこれからに生かしていきたい。
10	価値観・認識というよりは、僕は複式学級などのへき地校の仕組みが良く分からない部分があったので、そういう所を詳しく見たり、知ることが出来た。
24	複式授業に対する良さや悪さが見えたこと。
26	小規模校は学年の枠を超えて仲がいいので、良い所だと思った。
31	へき地での教育は、複式学級であったりして大変な面が多いと思っていた。でも、人々のつながりの深さは本当に深く感動した。皆良い人たちだし、子どもたちものびのびと自然に触れ合っていたので、この環境で子どもを育ててみたいなど意欲がわきました。
39	授業中うるさいことを注意するのではなく、のびのびと授業させて自分で答えを見つけることに重点を置いていた。
47	少人数だからこそ一人一人に対する接し方が大事である。
49	学校は生徒の人数が少なくても楽しい。
56	私自身へき地校での経験がなかったのですが、今回の体験を通して、先生と生徒の結びつきの強さに驚かされました。それは少人数学校のいい面だと思いました。
57	児童・生徒・先生が皆同じことに取り組む姿を見て、小規模校でもきちんと役割を決めて仕事をこなしたり、話し合うことが出来るのだと実感した。
61	授業に参加させてもらったりして、色々な学年の生徒と関わる機会が持てよかった。少ない人数だからこそ出来ることもあり、へき地の教員になりたいと思った。

No.	表2 研修を体験したことによる自身の教育観（価値観・認識）の変化について
63	学校全体でまとまっている。
76	へき地であることは人数が少なく、交友関係が狭いのではないかと考えていたところがありましたが、むしろ1～6年生全員が仲良く遊んだりご飯を食べたりするのを見て、何でも先入観で見ているのは本当の姿は見えないということが分かった。
83	子どもとの接し方を勉強しようと思った。
85	学年ごとのクラスでなくても、しっかり授業は行なえることが改めてわかった。初めて複式授業を見て、何も問題なく行なえることに驚いた。
87	全校生徒が一緒になっても授業はできるのだなと思った。逆に高学年の子が低学年の子にも教えたりなど良い面もたくさんあると思う。
89	複式授業は、学年別に板で区切ったりして分けると思っていたが、学年が違っても、自然な感じで明らかに区切った授業はしないんだなあとと思った。
95	学年にあった授業が必要。
99	へき地だと学年を越えて、しかも男女関係なく友達になれるし、先生も一人一人の名前を覚えられるし、温かくていいと思った。
100	大規模校よりも生徒・児童と先生との距離が近い感じがして、小規模のよさなんだなと思った。
104	人数は確かに少ないが、全然不足じゃない。学年を越えた交流もあり、とてもいい面を見せてもらった。
107	先生一人一人が、児童の特徴を掴んでいると思った。
111	悪い子が全くなかったのは驚きました。
114	へき地教育を試してみたいと思った。
129	子どもたちが皆本当に素直でいい子達ばかりだと思いました。そして先生たちも凄くおおらかで、学校全体が一つの家族のようだと感じました。
132	クラスの人数が少ないとクラス全員に指導がいきなり、出来る子出来ない子の差が少なくなると思った。
142	全ての先生方が授業に参加していて、1人では出来ないことも他の先生方の力を借りることで、出来ることの幅が増えると思いました。
143	全ての子ども、先生、保護者の一体感を感じました。
146	予想以上に縦割りの関係がしっかりしていると思った。複式の授業ではずらしながら授業をしなければならず大変だと思った。また、特別学級に入ったときどのように対応するかももっと勉強したいと思った。
147	小規模校の子どもたちは思っていたよりも結びつきが強く学年の枠を超えて仲良く共同作業できる姿を見ていると、大規模校が小規模校から学ぶことが多いのではないかと考えた。
150	一人一人に目が届き、まとまりが持てるという面で少人数制は良いと思った。学年を越えて強いつながりを感じた。
151	少人数の児童しかいないので、コミュニケーションをとりやすいと思っていたが、知らない人が来ることで児童は構えてしまい、なかなか難しかった。
154	人数が少ないと大変なイメージがあったが、へき地も他の学校と変わらないと思った。
155	人数が少ないと活動が限られてくると思ったが、少ないなりに色々工夫してやっていた。
169	へき地の方が人数が少ない分みんなが協力し、それぞれに役割が当たるなどのメリットがあり、ここが認められる機会が多いので、良いイメージになった。
173	複式授業では「わり」の授業と一緒にやる授業の両方を出来るようにならなければならないと思った。
3. その他（へき地教育への発想の転換）	
9	今までもへき地校をマイナスイメージで捉えたことはなく、むしろへき地校の教師になりたいと思っていた、実際に訪れてみても自分のイメージ通りだった。
11	へき地は教育が遅れていると思ったが、決してそのようなことはなく、皆活発に活動していて、将来はへき地に赴任したいと思った。
19	自分もどちらかといえばへき地・小規模の方に分けられるぐらいの学校出身なので、へき地・小規模校に対する価値観とかは同じだった。でも、この研修は素晴らしいものになった。
22	へき地校をプラスに考えることができるようになった。
23	人数の多い少ないに関わらず、学ぶ子ども、教える先生、協力する地域の人々で学校は成り立つという普遍的なことを改めて実感したような気がする。
25	自分が考えたよりも、もっと良い面も悪い面も分かった。
28	へき地にはへき地なりのメリット、デメリットがあるけど大規模校に劣るとは全く思えなくなった。
32	イメージとして持っていたマイナス面を全く感じなかった。へき地というのは、マイナスのイメージで考える言葉ではない。
33	大規模の小学校しか考えていませんでしたが、そんなこともないと思うようになりました。
34	学校の上下関係が全くなくて、違う学年と仲良くなっていることがすごいと思った。教師も子どもたちに本当の親みたいに関心して接していて、大規模校とはだいぶ雰囲気違って、「へき地の先生になりたい」と思いました。

No.	表2 研修を体験したことによる自身の教育観（価値観・認識）の変化について
35	へき地に対しての考えが変わりました。
37	へき地はイメージ的に良くなかったが、今日見てイメージが変わった。
40	へき地はマイナスイメージが強かったけど、今日の研修でプラスイメージに変わった。
46	へき地のイメージが頭のどこかで、マイナスに考えていたのが、今回の実習を通して、自分の経験してきた小学校というものとそう変わらないと思えた。
53	全体的に学校を見回すことが出来るので、見えてくるものがたくさんあった。
67	自分もへき地に行っていたので悪いイメージはもともとなかったが、学校がきれいでも物も色々整っていて不便はあまり感じなさそうだった。
69	もともと嫌なイメージはなかった。ますます、へき地に行きたくなりました。
74	体験を通さなければ分からないこともあること。
77	へき地校に対するマイナスイメージがなくなった。のびのびと生活している子どもたちを見て、へき地も悪くないと思った。
79	へき地を嫌がる先生が多いと聞いていたけど、先生方も一人一人が本当に熱心に温かく指導している姿を見て、やりがいのある仕事だと改めて思った。
88	どんな所の学校でもドンと来い！とこれからは思える。
91	プラス面に変わっていった。
93	へき地ということで大規模校の雰囲気と違うということにはなかったように思う。
97	へき地校・小規模校へのマイナスイメージがあったので、教師になったときは赴任したくないと思っていましたが、教師同士、子どもとの関わりがとても深く素敵な学校だと思いました。
113	子どもの距離が近いと思った。
117	中学1、2年生の授業を参観して、道徳の授業の裏に多くの知識や考えがあるんだと思いました。又、先生方が子どもを支えているんだということが分かり、教師に対する考えが変わりました。
118	今まで、人がたくさんいれば誰かに任せられることも自分でやろうと思った。大規模校より生徒との距離が近いから、もっと行動に責任を持って過ごせるようにしたい。あと、常に子どもの心を忘れないでいるのも、意外と大切なあとと思った。
128	へき地は素晴らしいと思えるようになった。
130	子どもたちの表情や先生方との関係を見て、改めて教員になりたいと思った。
134	今までマイナスイメージばかりだったが、プラスになった気がします。
136	へき地の学校の教育は充実していないと思ったが、よく出来ていた。
137	イメージがより明確になった。
138	小規模校の先生になりたいと思った。
152	控えめな感じ。突然の訪問に距離を置かれたようだ。
153	積極的に児童に関わった方が良いと再確認。
161	教師になりたいと強く思いました。
167	へき地にあまり関心はなかったのが正直なところですが、実際に行ってみると、凄く人と人との関わりがあって、学年の壁を越えて心が通じ合ってる感じがして、こんなに見方が変わるとは自分でも思わなかったのが驚いています。
170	今まで大規模校の先生方の実態しか知らなかった・見てこなかったのでへき地の先生方のことをよく理解でき、大規模校と小規模校2つの立場で物事を考えることができるようになったと思う。
172	教師や子供同士が本当の家族のように係わり合いを持っていて、どこか安心できる空間だった。今回の研修で得たこの雰囲気はこれから普通規模の学校で教える上でも非常に貴重なものだった。

最後に大学入学後の間もない時期に、へき地・小規模校の良さや楽しさを、児童生徒や先生方と行動を1日共にする感動体験が、大学生生活全体への励みや、へき地教師を目指すといった目標にも発展していた。

本研修は、研修後にも広がりを見せている。例えば、学生が研修直後の運動会に参加する例、秋の学芸会・学校祭にスタッフとして参加する例、等の継続的な学生とへき地校の交流が展開し、子どもや学校だけではなく、地域の人々との交流の輪を広げながら関係が発展してい

る学生も少なくない。

以上、これまでとらえてきたように、学生のへき地・小規模校での感動体験や訪問による教育的な効果が数値的にも自由記述からも明らかである。これらの教育活動が端緒的な教育効果にとどまらず、4年間の大学生活の学びの中で系統的に発展させていくことが今後の課題となる。

7. 小括 — 地域に根ざす教師教育の課題 —

本研究は、へき地の学校と地域に根ざす教師を養成する教師教育プログラム研究の一環として、新入生研修事業による1日へき地訪問の「感動体験」を基盤にした意識変化と教育効果を明らかにしてきた。

全道的に見ても道東には、へき地・小規模校が多く存在していることから、学生の時にへき地教育への理解を深めることがとりわけ求められている。北海道教育大学釧路校におけるカリキュラム関連の中では、学年段階に応じて1年生の一般教養科目の「へき地教育論」を導入として、へき地教育実習を含めたへき地専門教育に至るへき地教育を学ぶことになるが、新入生研修は、入学直後の最初のへき地現場体験として位置づけられている。すなわちへき地教育の講義をより理解するためにも、まずへき地小規模校の子どもたちの様子や学校全体の様子を実感しようとするものである。

新入生研修では、最初の「感動体験」として、出身の市街地の学校や市内の「教育フィールド研究」で行っている中規模・大規模学校とは異なる雰囲気のある学校をまず経験することから始めている。受け入れの学校では、児童とのふれあいを中心にして、へき地小規模校の特性が明確に出るような異学年全校交流集会や複式授業の参観などを提供していただき、そこに学生が加わって児童と交流することによって、大規模校との雰囲気が明確に認識できるようなプログラムを組んでいただいている。

この経験を振り返りに活かすために、1回だけであるが、事後指導で「シェアリング」を行い、学生が見たへき地小規模校および教師・子どもの特徴などを交流した。自分の新鮮な感動や意識の変化を学生全体で確認できるだけでも、個々の学生の励みになる。

学生の意識変化では、まず選択肢調査で全体の満足度をとらえた。その中では、「子どもたちとのふれあい」や「小規模校のすばらしさ」、「へき地・小規模校のプラス面」の項目すべてにおいて、高く評価していた。

さらに、記述式による意識も併せて分析した。全体の傾向では、学生が記述した関心の多くは、大規模校にはないへき地・小規模校の良さや、子どもどうしの関係の良さや積極的なかわり、へき地教育のイメージの転換など、へき地校と教師の指導の新しい発想を考えさせるものが多い。道東においてはへき地小規模校も多く、へき地の教職を目指す意識を高める契機となっている。

しかし、この新入生研修は、あくまでも自分の出身校や市街地の学校と比べた「感動体験」の域に留まるものとして位置づけている。したがって、この短期1日研修で得た感動的な経験を、へき地の学校と地域に定着する意識に高めていくためには、さらに、様々なへき地教育

に関わる講義とへき地教育実習に関わる経験の積み上げが不可欠となる。

今後の取り組みの課題としては、一過性の1日訪問に終わらずに一定程度同じ学校に通うことが、学校の取り組みを理解する条件になるため、継続的に通えることが必要になる。そして各学年段階における教育活動を通じて、総合的にへき地教育への理解を深められるシステムの構築が必要となる。そのためには、学校や教育委員会、地域社会との連携強化と、より多くの学生がへき地・小規模校での様々な教育活動に参加できるような環境づくりが求められている。1日のへき地訪問体験から、継続的な訪問やへき地教育実習などの体験内容の発展性の教育効果については、今後の課題としたい。

参考文献

- ・都市農村交流活性化機構編『感動の田舎泊—田舎で見つけた感動体験』2007年、都市農村交流活性化機構刊行
- ・降旗信一・朝岡幸彦編『自然体験学習論—豊かな自然体験学習と子どもの未来』2006年、高文堂出版
- ・神田嘉延著『むらの教育ロマン—へき地からの教育改革』2000年、鹿児島学術文化出版局
- ・平野秀典著『感動力』2007年、サンマーク出版
- ・大島清著『感動するとなぜ脳にいいか』2005年、新講社